

第三章 紅い瞳のディフェンダー

レグルスは立ち上がり、空を仰ぎ見た。

ファンネリアの放った魔法により、あたりの巨樹が焼き払われ、陽の光をさえるものはなくなってしまうたはずなのに、妙に薄暗く感じたからだ。

「空が……」

レグルスは、そう言ったきり絶句した。

レグルスの目に飛び込んできたのは黄昏時のような薄暮はくぼの空だった。

だが、気を失っている間にいつのまにか夕暮れになってしまったというわけではないらしい。その証拠に、中天には太陽が見えている。

もともと、今は霞かすみがかかったかのような、ほのかな光を放つ天体が変わってしまっていたが。

「時空結界を張りました」

ファンネリアの言葉を耳にし、レグルスがふり返る。

「時空結界？」

「はい。今、わたくしたちは加速空間の中にいるのですわ」

「それってつまり……」

レグルスは、しばし考え込んでから言葉を継いだ。

「見方を変えれば、おれたち以外の時の流れを止めたって言うか、極端に遅くしたってことか？」

「そういうことになりますね」

「何故そんな魔法を……」

言いかけて、レグルスは気がついた。戦いの決着はまだついていないことに。彼女が張った時空結界には、レグルスに治療術ちゆを施すための時間をつくりだすという意味があったのだ。

「残念ながら、氷結の魔法では魔獣を操っていた真の敵を倒すことができませんでした。広がりつつあった炎のほうは、なんとか消しとめられたようなのですが……」

ファンネリアはレグルスから視線をそらし、ぎゅっとくちびるを噛みしめた。「わたくし、巫女失格です。いくら自分の身を守るためとはいえ、聖獣ファーナをはじめたくさんの動物たちが、その住処すみかとしていている神聖な森の中で、よりにもよって爆炎系の魔法を使ってしまっなんて……」

肩を落としてファンネリアが言う。

その表情からは深い自責の念が見てとれた。

「誰にだって苦手なものはあるし、ときには恐怖にかられて冷静な判断を失ってしまうこともある。ファンネリアのことを責められる人間なんて、きつとどこにもいやしないさ」

「レグルスさん……」

「それに、もし責任を負わなければならないものがあるとしたら、それは、きみの命を狙って卑劣な攻撃をしかけてきた敵のほうじゃないかな」

レグルスの言葉に、ファンネリアの表情がふつとやわらいだ。

「お気遣いありがとうございます。わたくし自身、精神的にまだまだ未熟な部分があるということは、はっきり自覚していたのですが……」

「ファンネリアが精神的に未熟だなんて、絶対そんなことないって。もし、きみが精神的に未熟だって言うんなら、おれなんか恥ずかしくて街中歩けないぜ」

「……レグルスさん、やさしいですね」

可憐かれんで淑しとやかなファーナの姫巫女に、うるんだ瞳で見つめられ、レグルスは思わず赤くなつた。

「お、おれは……その……ただ、あたりまえのことを言っただけで……やさしいとか、そんなんじゃない……。そ、それより……」

ファンネリアはわずかに首を傾け、レグルスの言葉を待っている。レグルスは少し間をおき、気持ちを切り換えてから口をひらいた。

「これから戦う相手は魔族なんだから、かなり気を引き締めていかないとまずいぜ。もちろんおれも手をかすけど」

レグルスの言葉に、ファンネリアは動揺したようだった。眉をくもらせ、不安そうな表情でレグルスの顔をのぞき込む。

「ま、魔族、なのですか？ 姿を隠したまま、召喚魔法を使ってわたくしに攻撃をしかけてきたのは……」

「たぶん、ね。おれたちも、ついさつき魔族の少女に襲われたばかりだし、ファーナの巫女を一人残らず殺すのが目的とか言ってたから、まちがいないと思う」
 「ファーナの巫女を、一人残らず……。いったいどのような目的があつてそのようなことを……」

ファンネリアはそうつぶやくと、眉間のあたりに人さし指をあててそのまま考え込んでしまった。

「理由は分からない。けど、降りかかる火の粉は払わなきゃ」

言つてレグルスは、地面に突き立ててあつた自身の剣を引き抜き、背後をふり返つた。

クレーターの縁あたりに、黒っぽい半球形の空間が広がっている。今、レグルスたちがいるのはクレーターのちょうど中心あたりなので、距離はかなりある。が、その空間の中心に『敵』がいることは確かだった。

「アルティマールンシールドを張つて、ファンネリアの瞬間凍結呪文を防いだのか」

絶対魔法遮断結界は、あらゆる魔法を無効化する。それゆえ、ファンネリアの張つた時空結界内の加速空間からも取り残され、潜んでいた位置をさらすことになつてしまつたのだ。

「さてと、どうやって敵をあの中から引きずりだすか、だが……」

「それは、わたくしが何とかしてみます」

「できるのか？」

「はい。時空結界を解き、魔法消去に全魔力を集中させれば……。でも、そのまえにレグルスさんの戦闘能力を上げておきますね」

ファンネリアは静かに目を閉じ、両手をすつと広げると、呪文プレスアビリティの詠唱に入つた。

「戦乙女よ。彼のものに、至高なる力を！ 汝が魂の剣……」

「レグルス……」

ミアネージュはぼつんとつぶやいた。

心の中に生まれた言い様のない不安が、じよじよにその大きさを増していく。

結界の外には、白く輝く氷に覆われた氷結の世界が広がっている。

絶対零度が支配する凍てついた空間と初夏の森との境界あたりでは、激しい温度差から気流が生じ、凍りついた大気中の水蒸気が氷晶の雲となってあたりの視界を奪いはじめていた。

ぐずぐずしている暇なんかない。

早くしないと、蘇生魔法でもたすけられなくなっちゃう。

ミアネージュはひとり頷くと、魔法石の中から極寒の地などで使用されている特殊な防寒ジェルを取りだして全身をコートした。

「まってレグルス、いまたすけてあげるから」

ミアネージュの漠とした不安は、いまや確信に変わっていた。いくら思念波で呼びかけても返事がないのだ。そこから導きだされる答えは、一つしかなかった。しかし、ミアネージュが結界を解いて駆けだそうとしたまさにそのとき。

「！」

衝撃波をともなったまばゆいばかりの光芒が、ミアネージュのわきをかすめるようにして走り抜けた。

コンマ何秒か遅れて、背後の巨樹が轟音とともに崩れ落ちる。

「ここから先へは行かせない！」

前方の白い闇の中から、その声は響いてきた。

敵意のこもったまったく聞き覚えのない声だ。ミアネージュはワンドをかまえ、戦闘態勢をとった。

「誰？」

「それは、こっちのセリフよ！」

ダイヤモンドダストの渦巻く霧の中から、ミアネージュの前に現れたのは、意外にもエルフの少女だった。

白い巫女服を纏っているので、ミアネージュにはすぐにファーナの巫女なのだと思いがついた。しかし、相手の方はいぜん警戒心を解いていず、燃えるような真紅の瞳でこちらを睨みつけている。

「そこをどいて、早くしないとレグルスが……」

「質問に答えるほうが先よ！」

エルフの少女　ラミーナが、ミアネージュの言葉を遮り、言った。口調も態度も高圧的で高飛車だ。

ラミーナは亜麻色の髪に真紅の瞳、エルフ特有の長い耳を持った、どちらかといえば、線のほそい華奢な体つきの美少女である。それだけに、乱暴な物言いがきわだってしまう。

ミアネージュはカチンときたが、冷静さを欠くようなことはなかった。もちろん、レグルスのことを最優先に考えた結果である。

「あの、なにか誤解してるんじゃないやありません？」

「誤解？」

「そう、わたしがこの森をこんなふうにしたわけじゃないってことです」

「そんなことわかってるわ」

ラミーナは腰に手をあて、いかにも不愉快そうに、ふんつと鼻を鳴らした。

「だったら……」

「わかんない娘ね。貴女は何処の誰で、いま、何故この場所にいるのか答えなさいって言うてるのよ……」

「……………」

ミアネージュは怒りを隠すため、彼女から視線をはずし、ワンドをぎゅっと握りしめた。

「わたしの名前はミアネージュ。レグルスっていう男の子といっしょにファーナの神殿をめざしているところよ」

ミアネージュが素直に答えたせいか、ラミーナはいくぶん態度をやわらげた。

それでも、両手を腰に当てたポーズはあいかわらずで、小馬鹿にしたようなまなざしをミアネージュに向けている。

「デート気分で神殿めぐりでもしてるの？ ま、外から眺めるぶんには誰にだって出来るし、止めはしないけど」

「……………」

ミアネージュは、目の前にいるいけ好かないファーナの巫女を黙ってにらみつけた。

「あら、まさかとは思うけど、迷宮に入ろうとしていたってわけじゃないわよね？」

「だったら、どうだっていうの？」

ミアネージュの答えから幾らか間をおき、ラミーナは突如、大声で笑いだした。

「ぷっ、くっ、あは、あははははは……」
 「何がおかしいのよ!」

ミアネージュは怒りをこらえきれなくなって、思わず叫んでいた。
 「だって、あなたみたいなのひよっこが、本気でファーナの神殿を攻略するつもりでいるみたいだから、おかしくって……」

「実力がないなんて、言わせないわ。さっきだって襲^{おそ}ってきた魔族を倒したばかりだし、レグルスは鳳翼無影流^{ほうよくむえいりゅう}の……」

「魔族ですって? ウソをつくなら、もう少しましなウソをつくのね」

「嘘なんかじゃない! この森がこんなふうになったのだって、きつと魔族が絡^{から}んでるにちがいないわ!」

「どうかしらね」

「くっ、もうあんたなんかにかまってられない……」

言^いってミアネージュは、少女のわきをすり抜け、走りだした。

「あ、こら待ちなさい。そっちは……」

黒衣^{こくい}の貴公子。

そんな形容がぴったりとくる魔族の男がそこにいた。

靈威^{れいゐ}のあるダークグリーンの瞳を持ち、額^{ひたい}にある第三の眼は今もなかば閉じられた状態にある。身長はレグルスを大きく上まわり、腰まで届きそうなほど長く伸ばした黒髪も様になっている。鍛^{きた}え上げられた肉体は服の上からもそれとわかるほどで、見事というほかはない。胸鎧にマントといういでたちから推量すれば、魔剣士というのが妥当^{たとう}なところだろう。

レグルスとの距離は、ほんの数メートル。

魔族の男からみれば、レグルスがいきなり眼前に出現した。そんなふうを感じられたはずだ。

しかし、男に動揺した様子は見られない。

「剣の方も使えるんだろう? 抜けよ」

レグルスは、魔族の男にフォルシオンを突きつけ、言った。

むろん、背後から不意をついて攻撃を仕掛けることもできた。

が、レグルスはあえてそうはしなかった。

鳳翼無影流の看板を背負っているからというより、レグルスの男としての、また武人としての誇りがゆるさなかったのだ。

「ふん、つまらぬプライドのために、命を棄てるか。愚かな……」

黒衣の貴公子は双眸を閉じ、右手を無造作に前へと突きだした。

須臾の時あって、その掌の中に現れたのは、透明な水晶の刀身をもつクリスタルソードだった。

「我が名はゼノン。邪眼王の称号をもつ使徒の一人」

魔族の男　ゼノンが名乗ったことを受けて、レグルスも自らの名を告げる。

「俺の名はレグルス……」

《邪眼王》その称号を持つものは、あらゆる魔剣を使いこなすことができるという。

いくらブレスアビリティの魔法によって能力強化しているとはいえ、決して油断できるような相手ではない。

「レグルスさん、気をつけてください。その魔族が手にしている剣、おそらくただのクリスタルソードではないはずですよ」

突然、レグルスの頭の中でファンネリアの思念波がこえました。

ファンネリアは戦いの邪魔にならないように二人からかなり距離をとり、凍りついた魔獣の影に身を潜めている。

レグルスは相手に悟られないよう思念波で応えた。

「魔剣ということか？」

「おそらく。どんな力を秘めているのかわからないので、先手をとって全力で攻撃をしかけてください。相手が力をだしきる前に叩いてしまったほうが得策ですから」

レグルスはファンネリアの助言を心にとめ、周辺視野で慎重に相手との間合いをはかった。

「……鳳翼無影流、錬士」

ゼノンに意識を戻し、ほんのつかのま言いよんだふりをして言葉を継ぐ。

「錬士……だと？」

半眼で問うゼノンに、レグルスは躊躇なく返答する。

「そうだ」

「奥義の伝授すらまだすんでいない錬士ごときの剣が、邪眼王の称号を持つこの私に通用すると思うか？」

「無影流をなめると、痛い目にあうぜ。たとえ錬士といえども、他流派の師範なみの力は充分に持っている」

その言葉が終わらないうちにレグルスの手にしていたフォルシオンが白く輝きはじめた。と、同時にゼノンの全身から凄まじいまでの剣気が立ち上った。

相対する二人の気が虚空でぶつかって弾け、旋風が巻き起こる。

先に仕掛けたのはレグルスだった。

小刀と大剣という得物の長さの違いからくる不利を相殺するため、すばやく踏み込むと同時に魔法剣を放つ。

『波動光刃剣！』

フォルシオンより解き放たれた灼熱の刃が、大気をイオン化し、漆黒の衣を貫いた。だが、相手を仕留めたという確かな手応えが感じられない。

ちっ、幻影か！

そう悟った瞬間、レグルスは迷わずからだを沈めていた。クリスタルソードが唸り上げ、残像と化したレグルスを薙ぎ払う。

限界ぎりぎりまで筋肉に負荷をかけ、互いに一挙動で次の攻撃に転じる。

凍った大気の中で銀鱗が閃き、白刃が交差した。

ギンツ！

それは、まさに刹那の攻防だった。

フォルシオンがまっぶたつに両断され、剣の破片が宙を舞った。

「馬鹿な、俺のフォルシオンが……」

呆然とするレグルス。魔法剣の連続使用にも耐えうるほどの業物だったがだけに、その衝撃は大きかった。

なかば防御も忘れてその場に立ちつくしているレグルスに、ゼノンはクリスタルソードの切っ先を向け、言った。

「我が魔剣ダークブラストには、触れたものすべてを切り裂く力がある。それでもなお戦うというのならば、死は避けられないものと知れ！」

「触れたものすべてを切り裂く……」

つぶやき、その言葉の意味するところをかみしめる。

カツン。

レグルスの手からフォルシオンが抜け落ち、凍った大地の上を回転しながら滑っていった。

そんなレグルスの様を見て、ゼノンが剣をおさめようとする。

だが。

「なに勘違いしてんだよ」

顔を伏せたままレグルスが言う。

「おまえの剣が触れたものすべてを切り裂く魔剣だというのなら、直接刃を交えなければいけない。戦いはまだ終わっちゃいない」

ゼノンは表情を硬化させ、氷刃のようなまなざしでレグルスを見やった。

「……予備の剣ぐらいいは持っているのだろうな？」

レグルスは顔を上げ、腕輪の魔法石から一振りの刀をとりだした。

細身の長刀。だが、わずかに反りがある。

柄の造りこそ違うが、そのフォルムはあきらかに日本刀のそれだった。もっとも、いまレグルスたちが暮らしているこの世界に日本刀という言葉はもはや残ってはいない。その刀は、零式と呼ばれている。すべての刀の原点となったモデルだからだ。

レグルスはこのなんの変哲もない、魔力さえ帯びていない弧刀が好きだった。

何故なのか理由はよくわからない。だが、不思議な懐かしさを覚えるのだ。

「ふん」

レグルスの取りだした刀に一瞥をくれ、ゼノンが言う。

「片刃の長刀か、見慣れぬ剣だな。だが、魔力を帯びているような気配はない」

ゼノンは半身に構え、洗練された所作で大振りなソードの切っ先を地面すれすれまで下げた。いわゆる下段の構えである。しかし、レグルスはわずかに腰を落として戦闘態勢をとったものの、刀を鞘から抜こうとはしなかった。

ゼノンがふと挙措を止め、訊く。

「なんのつもりだ？」

刀を鞘におさめたまま居合いの型をとり、動こうとしないレグルスを不審に思っただろう。

触れたものすべてを切り裂くという魔剣と直接刀身を交えるわけにはいかない。

となると、方法はおのずと限られてくる。

「抜刀術を知らないのか？」

「……………」
ゼノンに返事はなかった。

「それが、おまえの流派の型だというのなら、何も言うまい。いくぞ！」

一対一の果たし合いにおいてどちらか片方が抜刀術を用いた場合、勝敗の帰趨は刹那のうちに集約される。瞬間移動が使えないような状況下においては、居合もまたひとつの戦術であるといえた。

まず、刀を鞘におさめたままなので、相手が間合いをはかりにくくなる。また、抜刀時に刀を鞘走らせることで斬撃のスピードが増す。そして、後の先をとることによって、相手の動きをある程度限定し、攻撃が予測しやすくなる。これらの利点をうまく生かすことができれば、剣が秘めている絶対的な力の差を埋めることができる。レグルスのねらいもそこにあった。

下段からの跳ね上げにより、凍りついた大地がぱっくりと裂け、大気に竜鳴線が生じる。しかし、クリスタルソードの描く軌跡がレグルスを捉えることはなかった。

ヒュッ。

大剣の切っ先が飛燕のごとく弧を描き、ほとんど時間差なしに、二撃目が飛んでくる。

風切り音をともなった横薙ぎをあくまでも居合いの型をくずすことなく、斜め後方に飛び退くことでもかわす。

神経を研ぎ澄まし、相手の微妙な筋肉の動きや気の流れから、次の攻撃を読む。連撃に続く連撃。

正確で重い魔剣による攻撃。人間離れたスピードで繰りだされるその剣先を、驚異的な体さばきでことごとく退けていく。

抜刀するときは、それが必殺の一撃でなくてはならない。

その一瞬を見きわめるため、レグルスは相手の攻撃をできうる限り大きくはずし、たえず間合いをとるようなかたちで躲しつづけていった。

「ちっ」

ゼノンは、攻撃を読まれていることを悟り、舌打ちして大きく距離をとった。

その位置から今度は前へと一步を踏みだし、そのまま剣に加速をのせて真空波を放つ。

ドンッ。

魔法障壁が見えない刃を受けとめ、大気が鳴動する。と、同時にクリスタルの刃がレグルスを襲った。

苛立ちから、攻撃が雑になった。

その、あるかないかのわずかな隙を衝き、いままで横や後ろに退くだけだったレグルスがはじめて鋭い踏み込みをみせた。

銀の軌跡が弧を描き、白刃が閃いた。

どんなに動体視力のすぐれたものでも、その動きを捉えることはできなかっただろう。

殺った。

抜刀した瞬間、レグルスはそう確信した。

しかし。

刃が、ゼノンの胸を払った刹那、思いもかけない鈍い手応えが返った。

「?!?」

のたうつ蛇のように暴れまわる青白い電光　高圧電流の群が、零式を通じてレグルスの軀に流れ込んできたのは、その直後のことだった。

「ぐはっ」

まるで、落雷を受けたかのような衝撃とともに、レグルスはその場から大きく弾き飛ばされた。ゼノンは、攻防一体の帯電結界を纏っていたのだ。

地に伏したレグルスに向け、ゼノンがとどめの一撃を放つ。クリスタルソードの刀身が虹色に煌めき、空を切り裂く。

「くっ」

そのとき。

「レグルスさん！」

ファンネリアの悲鳴のような思念波の叫びが、薄れかけていたレグルスの意識を呼び覚ました。だが、レグルスには、もはや身体を動かすだけの余力が残っていない。

キィィィン。

甲高かんだかいクリスタルの共鳴音が、あたりに響きわたった。

魔剣は虚空こくうの一点で虹色の干渉波をだしながら静止している。

「ちっ、おまえか」

ゼノンが、ファンネリアを振り返る。

魔剣の一撃を受けとめたのは、ファンネリアの張った魔法障壁だった。

「邪魔をするな！」

大剣の一振りにより生じた真空波が、ファンネリアを襲う。しかし、真空波はファンネリアの直前で大きく軌道を変え、凍りついた魔獣数体を薙ぎ払って消滅した。

「ファーナの巫女をひとり残らず消し去って、そのあとにいったい何をするつもりなのです？」

凜然りんぜんと、相手をまつすぐに見据え、ファンネリアが問う。

ゼノンの動きが止まった。

「神殿の破壊？ それとも、十二神柱そのものをこの世からなくしてしまおうとでも？」

「何故、そのことをおまえが知っている？」

「尋ねているのは、わたくしの方です！」

邪眼王の称号を持つ魔族を相手に、一步も退かない気迫をみせるファンネリア。「これから死にゆくものが真実を知ったとて意味はない」

「永遠の眠りをお望みですか？」

くちもとに微笑をたたえたまま、ファンネリアが言う。

魔法の詠唱に入ったのは、双方同時だった。

だが、先に詠唱を終えたのはゼノンである。無数の火球が、ゼノンのまわりの空間に出現し、渦うずを巻きながらファンネリアめざして襲いかかる。

爆発と火炎がそこに地獄を現出させた。

氷の彫像と化していた魔獣の群が焦熱しょうねつの嵐にあい、いともあっけなく消滅していく。

しかし、ファンネリアは真球の結界を自己のまわりに展開し、これを苦もなく防ぎきった。

詠唱はいまだに続いている。

彼女が口に行っているのは、禁呪であった。呪文の詠唱なしにすべての魔法を使えるようにするための最終呪文。

詠唱が完結し、いったん魔法が発動してしまえばファンネリアの勝ちほぼ確実なものとなる。

「くっ、まさかファーナの巫女にその魔法を使いこなせるものがいたとは……」
ゼノンの気に乱れが生じた。我を失うほどではなかったが、さすがに焦りの色は隠せない。

「これほど早く奴を使うことになるとは思ひもしなかったが、やむをえまい」
ゼノンは闇色のオーブを取り出し、頭上へと放り投げた。

「雷竜ヘクスレッグ！」

ミアネージュは大地に穿たれたクレーターまであと一歩というところで、後ろからラミーナに羽交い締めはがじにされ、行動の自由を奪われてしまった。

「は、離してよっ！」

「だから、だめだって言ってるでしょ。ファンネリアは一度キレたら手がつけられなくなるの。いま近づいたらあなたまで巻き添えをくっわよ」

「そんなこと……」

ミアネージュは、手首の先だけでワンドを振って、魔法発動の鍵となる言葉を唱えた。

『ブレスアビリティ
戦乙女の吐息！』

「え？」

ミアネージュのからだを真紅の光が覆おおう。

その光景を目の当たりにして、ラミーナの瞳が大きく見開かれた。

「そんな、呪文の詠唱なしにどうやって……」

ミアネージュは増大した膂力くちからにものをいわせ、ラミーナを強引にふりほどいて駆けだした。

「ま、待ちなさいよ。あなたいま、いったい何を……」

ラミーナがあわててミアネージュを追いかけたとき

突然、少女たちの前方の空間に闇が広がり、大気が鳴動した。

「なっ……」

ミアネージュが絶句して立ち止まる。

その眼前、クレーターの中央付近に現れたのは、鈍色の体躯に銀色の翼を持った巨大な竜。狂暴凶悪なことで知られるアークドラゴンだった。

「うそでしょ……」

ラミーナが啞然とした口調でつぶやく。

本然の恐怖を引き起こすような竜の咆吼が、あたりに轟きわたった。

「ひっ」

ラミーナは思わず自身の長い耳を手で覆い、目を閉じた。

気配を感じたのか、アークドラゴンが振り向き。

金色に輝く邪眼が、ふたりの姿を捉えた。

つかのまの静寂に、恐る恐る顔を上げるラミーナ。

「あ、あはっ、目が合っちゃった」

少女の口から、まるで人ごとのような言葉がもれる。

「気をつけて、プレスがくるわよ！」

ミアネージュが叫んだ。

その直後。

巨大な顎から吐きだされた灼熱のプラズマが、ふたりを襲った。

「きゃあああああっ」

悲鳴を上げながら、ラミーナが魔法障壁を展開する。

凍りついた大地がまばたきする間もなく溶融し、気化した。

「こんな、瞬間移動もできないような森の中で、どうやってあんなのと戦えっていうのよ！」

ラミーナが泣きわめく。

「リリカはそのまま防御に専念してて、あとはわたしがなんとかしてみるから」

ミアネージュがラミーナをふり返って叫んだ。

「リ、リリカって誰のこと？」

「えっ？ あ、ごめん。あなたがわたしの知ってる娘に雰囲気なんかそっくり

だったから、つい……」

「そ、そう……」

「わたしはミアネージュ。ミアって呼んでくれてかまわないわ。あなたは？」

「あたしは精霊使いのラミーナ。ファーナの巫女よ。……って、悠長に自己紹介なんかしてる場合じゃないでしょ！」

「あはっ、そうだね」

ミアネージュはにっこり笑ってうなずいてから、アークドラゴンに向きなおった。

マジックワンドを水平に構える。

「青き鳳凰を宿せし聖なるワンド、セレニティルーンよ。いにしえの契約にもとづき、ミアネージュが命じる。敵を切り裂く猛き剣に！」

言葉とともにワンドがミアネージュの手を離れ、宙に浮く。

やがて、あたたかな白い光に包まれその姿を変えはじめた。

「ワンドが小太刀に？」

ラミーナが目を丸くする。

それは、どこか古風な趣のある抜き身の小刀だった。

ミアネージュは、眼前の小太刀を手にとり、つぶやいた。

「……リリカ。あなたの技、借りるね」

いまこの場所にはいない朋友に礼をすませると、精神の集中をはかるために瞳をとじ、詠唱を開始した。

集え粒子よ

力ある波動となれ

我は闇を切り裂くもの

白き翼の姫皇ミアネージュ

わが真の名において

その力 そのすべてをいまこそ解き放たん

処女神降臨

ふたたびアークドラゴンがブレスを吐き、大地に激震が走った。

視界がホワイトアウトし、平衡感覚があやしくなりはじめる。

「タイミングはどうするの？ いま結界を解いたらあたしたち間違いないく黒こげ

よ」

ラミーナのもつともな問いかけに、ミアネージュは思念波で答えた。

『そのまま結界を張りつづけていて』

「えっ？ でも結界を張ったままじゃ、魔法剣は……」

『だいじょうぶ』

ミアネージュは小太刀を両手に持って半身はんみに立ち、からだを捻ひねって居合いいに近い独特の型をとった。

そして。

結界の中から渾身こんしんの力を込めて魔法剣を放った。

『聖波動麗鱗斬せいぱつれいりんせん！』

技そのものがあまりにも速すぎて、ラミーナには魔法剣の軌跡を捉えることができなかった。

しかし、竜の咆吼ほうこうが不意にとぎれたことで、何らかの効果があつたことは理解できた。

「命中……した!？」

ラミーナがつぶやいた。

その数瞬後。

ズウウウン。

腹の底から突き上げてくるような重い地響きとともに、アークドラゴンの巨体が大地の上に倒れ伏した。

「ふうっ」

ミアネージュは大きく息をつき、額の汗をぬぐった。

その手の中で小太刀が変容し、ふたたびワンドの姿をとる。

アークドラゴンはすでに絶命していた。鉄よりも硬いといわれる竜鱗をもともせず、聖なる波動が急所をつらぬいていたのだ。

「すっい……」

ラミーナの口から感嘆かんだんの声がもれる。

「あなた、いったい何ものなの？」

「何ものって……、ただの魔導士見習いだけど？」

「うそよ。だって、結界の中から魔法剣を放つなんて、ふつうできないわよ。それに一発であの凶悪なアークドラゴンを倒しちゃうし……」

「えっと、あの技はリリカって娘のオリジナルなの。わたしはただ、その技をちよこつと借りただけだから……」

「……そうなの？ でも、やっぱりすごいわ。他人の技をあんなにあっさり決めちゃうなんて」

「そうかな……」

「そうよ」

さっきまでとはあまりにも違うラミーナの反応にとまどいながらも、ミアネージユはにっこり微笑んで応えた。

「ありがとう。ファーナの巫女のあなたにそう言ってもらえると、なんか自分に自信が持てそう……」

「うん」

ラミーナが微笑みを返しながらうなずく。

「あの、ラミーナ……」

ミアネージユは、ふとレグルスのことが気になってラミーナから結界の外へと視線を移した。

「とりあえず、小康状態みたいね」

ミアネージユの肩越しに外を透かし見るようにして、ラミーナが言う。

「ラミーナ、おねがい結界を解いて」

「そんなに慌あわてなくても大丈夫よ。レグルスくんなら無事だから」

「えっ？」

「今、ファンネリアと思念波で連絡を取ったの。レグルスくんかなり消耗してるみたいけど、命に別状はないから安心して」

「よかった」

ミアネージユはラミーナの言葉を聞き、ほっと胸をなで下ろした。

魔族たちがその覇はを争い、力による統治が行われている世界リグファントム。

その王都シャリエラにあるアズラエル城の一室がロゼの住処だった。

部屋は充分すぎるほど広く、調度も整っている。

だが、華美な感じはしない。贅を尽くしてつくられた客室に比べれば、むしろ質素とさえいえたかもしれない。

「あいつ、名前なんて言ったっけ……」

窓の外をぼんやりと眺めながら、ロゼはつぶやいた。

「あたしは本気で命、殺りにいったのに……」

ロゼは掌中の首輪に視線を落とす。

極大呪文の刻まれた銀色の首輪が、沈みゆく陽の光をつけ、茜色に輝いている。生と死が交錯した瞬間が、まざまざとよみがえった。

「姉様はあたしを使い捨ての道具としてしか見ていなかった。けど、あいつは…

…」

首輪にななめに走った切り口を指先でなぞる。

と、そのとき。

「誰？」

ふと気配を感じてふり返ると、そこにゼノンが立っていた。

「義兄さま……」

「気分はどうだ？」

「最悪」

ロゼはペロツと舌をだしてみせながら、ゼノンに気づかれないよう首輪を魔法石の中にしまった。

やや間をおき、ゼノンが静かな口調で尋ねた。

「何故、ついてきた？」

「だって、義兄さまひとりじゃ心配だったから……」

「あのとき、オルトレーゼからの知らせがなかったら、おまえは今ごろこの世にいなかったのだぞ」

「雷竜で相手を牽制している間に、極大呪文でも唱えていたの？」

「……」

沈黙を肯定と捉え、ロゼは質問をつづけた。

「義兄さま、革命って何？」

「真の自由と平等を民にもたらすための戦いだ」

「じゃあ、人殺しは善？ それとも悪？」

「……おまえの言いたいことは、理解できる。だが、革命にある程度の犠牲はつきものだ。むろん、冥界へと送らねばならぬ者の数は少ないに越したことはない。そうなるよう努力すべきではあるが」

「あたしは、これ以上あの世界に干渉するのには反対だな」

「では、十二神柱という重い枷かせに苦しんでいるものたちを、おまえは捨ておけというのか？」

「あの世界の人たちが苦しんでいるって、どうしてわかるの？」

ロゼに問い返され、ゼノンが沈黙する。

「あたしは今まで姉様のいうことだけを信じて、やみくもに戦ってきた。けど、もうついていけない……」

「神殿を守る巫女たちのことが」

「そうよ。なんの罪もないのに、殺されなければならないなんて、どうかしてるわ」

「神殿の地下深くにある、クリスタルのみを破壊できるような方法が、あればいいのだが……」

「……」

会話はそこでとぎれ、寂さびとした静けさが訪れた。

夕日が地平に沈み、昼が夜にその座を明けわたす。

日が暮れたことを契機けいきに、ゼノンは入ってきたときと同様、物音ひとつたてずに部屋を出ていった。

「そんな方法……」

ロゼはベッドに身を投げたし、つぶやいた。

「あるわけないじゃない」